

はじめに

中世考古学という用語が、考古学界に定着して久しい。考古学と聞けば旧石器時代から古墳時代という文字のない時代を研究する学問という印象が強い。しかし、考古学はモノから歴史を分析する方法論であり、決して時代を限るものではない。文字による記録のある時代の考古学は歴史考古学と称されていたが、高度経済成長に伴う発掘調査の急増によって数多くの古代、中世、近世遺跡が確認され、歴史考古学は中世考古学、近世考古学と細分されるようになった。

その中世考古学の代表的な遺跡として城館遺跡があげられる。城館遺跡とは軍事的な防御施設として構えられた城郭や、平時の居住施設として構えられた館などで、全国に約3～4万ヶ所も分布している。まさに日本の中世は大築城時代であった。

ところで、城郭の研究は古くより、城郭研究者によって進められてきた。特に地表面に残された遺構を図化して築城主体や年代を考える、縄張り研究がその中心となっていた。こうした、縄張りによる城郭研究の方向を大きく転換させたのが考古学であった。

高度経済成長における国土の開発は平地の居館だけではなく、山城をも飲み込み、数多くの城館遺跡が調査の対象となった。こうした発掘調査によって地表面では知ることのできなかった建物構造や防御施設が明らかになっただけでなく、出土した遺物から城館遺跡の存続年代や交易・流通、中世都市や宿・町・集落等の実態を分析することも可能となった。さらに発掘調査成果は年々蓄積され、城館遺跡研究にとって考古学による調査・研究は主流となり、必要不可欠な研究分野として期待されるようになった。

ところが、不思議なことに、これまで城館遺跡の考古学的調査・研究成果が総括的に扱われたことはなかった。そこで現在の到達点をまとめようとして編んだのが本書である。もちろん、本書によって城館遺跡のすべてが網羅的に理解できるわけではない。とりあげられなかったテーマや課題も、まだまだ山積しているが、積み残した多くの問題は、全国の研究者と手を携えて、今後取り組んでいきたいと考えている。

本書は、大きく4部構成とした。第1部では遺構論と遺物論を取り上げた。城館遺跡からは遺跡を特徴づける様々な遺構が検出されている。そうした城館特有の遺構について、地表面に残されたものにとどまらず、城館遺跡で発掘調査された各遺構について全国的な集成を試みたうえで、その遺構の出現時期を考古学におさえ、さらに時期的な変化や変容の具体的なあり方を考察し、地域的な個性があるかどうかを把握することとした。重要な遺構すべてを網羅したわけではないが、どのような視点で遺構を分析していけば、より豊かな歴史像を描くことができるのか、各執筆者の目線で存分に提言されているので、大いに参考にしてもらいたい。

遺物論では城館遺跡で出土した各種遺物について、全国的な集成を試みたうえで、それぞれの遺物のもつ特性や出土量、分布のあり方などを踏まえて、城館遺跡の性格を考察した。遺物論に関しては、土器・陶磁器などを対象とした優れた先行研究があり、本書ではそれらをすべて組みこむことはできなかった。あわせて膨大な遺物研究の成果をご参照願いたい。

第2部・第3部では東日本と西日本において10世紀から17世紀初頭までの基準資料となり得る城館遺跡を、地域の定点資料としてとりあげた。城館遺跡の構造がどのようなものかを、考古学による方法論でもって年代別に押さえ、地域的な特徴も明らかにすることを試みた。時代も地域も少々かたよったものになったが、定点資料

として議論できる遺跡は、じつのところ、さほど多くはない。なにせ城館遺跡は、再利用と改変を繰り返すことが珍しくなく、遺跡の年代を判断できるほうが稀なのである。

論じるだけの資料をもう少し蓄積していく必要がある時代や地域は、今後の課題となるが、中世文書が数点しか残っていないたくさんの地域にとって、考古学によせられる期待は、ひじょうに大きい。第2部・第3部に収められた各論考は、さながら地域史研究の基礎資料でもあり、これらを参考にしながら、未解明の時代や地域の掘り起こしを全国で進めてもらいたい。

最後の特論では、文献史料から15世紀の城館を考えることとした。城館遺跡の特徴として、大半の城館が16世紀に改修を受けており、考古学的に良好な状態で検出されにくい15世紀段階の城館遺跡の構造を文献史料によって、どのようなイメージがつかみだされるのかを提起してもらった。そもそも考古資料というのは寡黙なもので、自らは絶対に歴史を語らない。考古学には形式編年があるとの声も聞こえてくるが、編年研究は時期幅を見極めるための基礎作業であって、編年に基づく相対年代によって遺跡の時期が絞られるに過ぎない。遺跡の実年代は、文献史学の研究成果なども踏まなければ与えられないのである。ならば考古学も文献史学が提示している歴史研究を自分の血肉にしなくては、考古資料に歴史を語らせることはできない。文献史学の重厚な蓄積に多くの考古学者は目を丸くするばかりだろうが、ぜひ、少しでも読み込んで自分のものにしてほしい。そのための特論でもある。

巻末の総括で指摘されているように、中世城館は一般の方が興味をもってくれる大切な遺跡である。この遺跡をたんに歴史研究の対象に終わらせず、史跡整備などを通じて、一般市民に還元していく仕事も、考古学には求められている。そのことを疑う人はいないだろう。城館研究と同時平行で、いつも頭の片隅にとどめておきたいことである。

本書では、以上のテーマ群について、それぞれの第一人者に執筆を依頼することができた。編者のひとりとして、現在の最高水準の調査・研究成果をまとめることができたことと自負するところである。執筆者のみなさまには本書の企画にご賛同いただき、ご多忙のなかご執筆いただいたことに感謝申し上げる次第である。また、本書刊行の趣旨に賛同くださり、出版をこころよく引き受けて下さった高志書院の濱久年氏に心より感謝の意を表したい。氏の叱咤激励と厳しい編集がなければ本書を刊行することはできなかった。

本書の成果がこれからの城館遺跡研究の基本文献となり、末永く活用されるとともに、他分野の研究者と協力しあいながら、中世城館の新たな歴史像が描かれることを願ってやまない。

平成26年4月

編者 中井 均

中世城館の考古学

目 次

はじめに

第1部 遺構論・遺物論

- 城郭を囲うもの—惣構とは何か—……………佐々木 健策 11
はじめに／1. 文献史料に記された「惣構」／2. 発掘調査により明らかになった「惣構」／おわりに
- 曲輪配置……………岡 寺 良 25
はじめに／1. 発掘された遺構の実態／2. 曲輪配置の多様性／おわりに
- 堀・堀内障壁〔障子堀〕……………宇留野 主税 33
はじめに／1. 発掘された城館の溝と堀 分類と年代観／2. 堀の変化 東日本を中心に／3. 分布と地域性 堀Dの年代と分布／まとめと課題
- 畝状空堀群……………高屋 茂男 47
はじめに／1. 発掘された遺構の実態／2. 時期ごとの遺構の変化／3. 分布と地域性／まとめ
- 切 岸……………中 井 均 65
はじめに／1. 検出された切岸／おわりに
- 虎 口……………中 井 均 75
はじめに／1. 現在の虎口研究／2. 検出されない虎口／3. 虎口を守るもの／4. 虎口から虎口「空間」へ／5. 虎口と門／おわりに
- 石積み・石垣……………乗 岡 実 85
はじめに／1. 発掘された石積み・石垣／2. 全国的な分布と展開状況／3. 城館内での構築場所／4. 戦国期城館の石積み・石垣の特徴／5. 織豊系城郭の石垣への傾斜／まとめ

| | | |
|--|-------|-----|
| 櫓 | 加藤 理文 | 103 |
| はじめに／1. 発掘された櫓遺構の実態／2. 時期ごとの櫓遺構の変化・分布と地域性／おわりに | | |
| 掘立柱建物 | 山上 雅弘 | 117 |
| はじめに／1. 12～13世紀の居館と掘立柱建物／2. 室町時代の居館と掘立柱建物／3. 戦国時代の掘立柱建物／4. 東日本の掘立柱建物／5. 近世への予察／おわりに | | |
| 礎石建物 | 早川 圭 | 129 |
| はじめに／1. 礎石建物の構造と位置・規模・機能／2. 遺構の変遷と画期／3. 礎石建物の技術と地域性・階層性／おわりに | | |
| 橋 | 松井 一明 | 141 |
| はじめに／1. 遺構の実態／2. 分布と地域性／おわりに | | |
| 山城の城内道 | 松井 一明 | 157 |
| はじめに／1. 遺構の実態／おわりに | | |
| 平地の方形館 | 水澤 幸一 | 169 |
| はじめに／1. 研究の現状と方形城館の定義／2. 方形溝連続・連結遺跡／3. 方形城館の実態／4. 分布と地域性／おわりに | | |
| 城館跡出土銃・砲弾への評価 | 金子 浩之 | 185 |
| はじめに／1. 出土弾丸の諸相と類型／2. 出土弾丸の具体例／3. 鉄砲伝来論への疑問と出土銃砲弾／4. 後北条氏の鉄砲製造とその供給先／5. 砲身と関連遺物の出土例／6. 鉄砲使用の変遷と近世銃の姿／まとめ | | |
| 中世城郭出土の貯蔵具 | 柴田 圭子 | 199 |
| はじめに／1. 出土事例／2. 分析／3. 備前焼貯蔵具出土城館／まとめ | | |
| 調理具—関東地方の播鉢を中心に— | 秋本 太郎 | 215 |
| はじめに／1. 各地域の状況／2. 遺物から読む城館の性格／3. 在地土器の流通／おわりに | | |
| 安土築城以前の瓦 | 中村 博司 | 227 |
| はじめに／1. 「安土築城以前の瓦」の分布状況／2. 「安土築城以前の瓦」の特色と意義／まとめ | | |

第2部 地域の定点資料 東日本編

- 東北北部における古代末期の囲郭集落……………八木 光則 243
はじめに／1. 囲郭集落の概要／3. 山地集落／4. 北海道における囲郭施設を
もつ遺跡／おわりに
- 11～12世紀の柵と城館—東北地方の事例から—……………高橋 学 255
はじめに／1. 地域の概要／2. 時代の定点資料／3. 柵・城館の成立と展開／
おわりに
- 鎌倉・南北朝時代の館と城……………向井 裕知 273
はじめに／1. 概 要／2. 年代の定点資料／3. 城館構造と地域性／おわ
りに
- 南北朝・室町期の城館—東関東地域を中心に—……………広瀬 季一郎 285
はじめに／1. 東関東の地域性／2. 城館の定点資料／3. 城郭構造と地域性／
おわりに
- 甲斐武田氏の本拠—武田氏館跡と新府城跡—……………佐々木 満 299
はじめに／1. 甲斐武田氏と本拠の概要／2. 年代の定点資料／3. 城館構造と
地域性／おわりに
- 近世初期・奥羽における蒲生氏の城……………平田 禎文 311
はじめに／1. 蒲生氏の領地と時代の概要／2. 年代の定点資料／3. 城館構
造と地域性／おわりに

第3部 地域の定点資料 西日本編

- 遠江・駿河 室町～戦国初期の城館—勝間田城・横地城を中心に—… 溝口 彰啓 325
はじめに／1. 城館の様相／2. 勝間田城の遺構と遺物／3. 横地城と関連遺跡
の遺構と遺物／4. 勝間田城・横地城にみる室町～戦国初期の城館構造／ま
とめ
- 【事例報告】大内城跡—12世紀の事例—……………伊野 近富 337
はじめに／1. 大内城跡の概要／2. 館から墳墓そして城へ／おわりに

| | | |
|--|-------|-----|
| 南九州の城郭——群郭式の曲輪配置と近世麓集落の連続性—— | 上田 耕 | 345 |
| はじめに／1. 南九州の拠点城郭の特徴／2. 薩摩半島の拠点城郭／3. 南九州の拠点城郭への視点／4. 近世麓から中世拠点城郭を考える | | |
| 長曾我部氏の城郭——土佐における織豊期城郭から近世城郭の成立—— | 松田 直則 | 361 |
| はじめに／1. 長宗我部氏の本拠岡豊城／2. 岡豊城跡から大高坂城跡へ／3. 浦戸城跡の瓦と石垣／4. 土佐統一に向けた長宗我部氏の築城技術／5. 四国制覇に向けた長宗我部系築城技術での侵攻／おわりに | | |
| 伯耆・因幡の城館 | 中森 祥 | 375 |
| はじめに／1. 地域の概要／2. 年代の定点資料／3. 城館構造と地域性／おわりに | | |
| 吉川氏城館跡 | 小都 隆 | 387 |
| はじめに／1. 安芸と備後の中世と吉川氏／2. 吉川氏の城と館／3. 吉川氏城館跡と安芸・備後の城館跡／おわりに | | |
| 伊勢国司北畠氏の城・館と「都市」 | 竹田 憲治 | 401 |
| はじめに／1. 北畠氏館跡／2. 北畠氏関連城郭群／3. 「中世都市」多気／おわりに | | |
| 近江の上平寺城から小谷城へ | 高橋 順之 | 409 |
| はじめに／1. 上平寺城および小谷城の概要／2. 16世紀北近江の定点資料／3. 城郭構造と地域性／おわりに | | |
| 小牧山城・岐阜城・安土城 | 内堀 信雄 | 423 |
| はじめに／1. 各城の構造／2. 構造の検討／おわりに | | |

特 論 文献史料から読む15世紀の城館

河内嶽山合戦の構造……………小谷 利明 441

はじめに／1. 畠山義就の河内下向／2. 嶽山合戦／3. 嶽山落城／4. 義就の上洛戦／5. 嶽山合戦にみる南河内の城と兵糧／おわりに

15世紀の城館……………齋藤 慎一 451

はじめに／1. 京都と「城」／2. 文献資料に見える城館／3. 「城」と「館」／4. 「城郭」と「城」／5. 「要害」／おわりに

総括 中世城館跡の保存と整備・活用……………萩原 三雄 479

はじめに／1. いくつかの保存, 整備, 活用の事例から／2. 中世城館跡の整備の意味／3. 中世城館跡整備活用の今後／おわりに

執筆者一覧 485